2011年12月26日発行

ニュースレター No.29
News Letter
CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

奉仕に生きる

学院長　森島牧人
（国際理解とボランティア研究プロジェクト）

大学のベンネットホールにその名を残すアルバート・アーノルド・ベンネット博士は、関東学院第一の源流である「横浜バプテスト神学校」の創設者である。と同時に、学院のモットー、「人になれ　奉仕せよ」の精神的源泉でもある。横浜外国人墓地にある彼の墓石に彫られた“He lived to serve.”の文字が、それをよく物語っている。事実、ベンネット博士は、1896年の三陸地震津波では明治政府から感謝の金杯が贈られたほど、日本人被災者のために献身的に働かれた。そして今回の3.11東日本大震災においては、本学院の多くの生徒・学生・教職員・保護者・同窓生が、心を合わせ御旨に協働し、校訓の精神の具現化に努めた。＜奉仕に生きる＞、これは関東学院の大切な伝統である。

さて、校訓が伝える「仕える人」とは如何なる人であろうか。ギリシャ語原典新約聖書では、＜ὑπηρέτης（ヒューペレテース）＞という言葉が用いられている。この語は、二つの部分、ὑπό（下の）+ἐρέτης（漕ぎ手）から出来上がっており、ガレー船の一番下で櫓を漕ぐ奴隷の有り様を示しているものである。

また、ギリシャ語聖書と対になるラテン語聖書では、「仕える人」という意味のヒューペレテースにあたる言葉として、ラテン語の“minister”が用いられている。この言葉は時代の変遷と共に、「神」に仕える人として「聖職者」の意味に転じ、さらには「君主」に仕える人として「大臣」の意味でも用いられるようになり、「英語化」してゆくのである。

すると、大臣、公使、牧師、司教、聖職者を意味する“minister”の職にあるものとは、最下位の奴隷のように仕えるものであり、まさしく与えられたその働きを通して、神とこの世に仕える存在であると言えよう。その意味では、仕える人の視点とは、上からではなく底辺から、中心からではなく辺境からのものである。

横浜外国人墓地のベンネット博士墓碑
“He lived to serve.”の文字が刻まれている。
（写真提供：学院史資料室）

救援ボランティアに続くこれからの関わり

「いのちを考える」研究グループ

松田 和憲

はじめに

2011年8月2日から9月9日まで、宮城県・南三陸町において災害救援ボランティア活動を実施した。学生諸君および教職員の積極的参加があり、かつ大学後援会や燦葉会（同窓会）の協力を得、総勢75名の学生、教職員が参加した。各グループ4泊5日の旅程で、5グループの活動を実施することができた。綿密な準備と予想以上の学生たちの活躍があり、現地の人々との出会いと心温まる関わり合いも生まれた。大きな事故もなく、成功裡にこのプログラムを終了できたこと、プロジェクト・リーダーとして心から感謝の念を覚えている。

具体的な活動の様子、内容等については、他の紙面においても、参加者の報告や活動の記録がなされているので、ここでは活動を通して特に痛感したいくつかの点と、大学として今後どんな関わり方をしていったら良いのか、その2点に絞って記してみたい。

1．この活動を通して学んだこと

(1) この学生ボランティアチーム立ち上げは、5月の連休に大学の教員4名が、ある方の紹介により宮城県登米市旧鱒淵小学校で避難生活をされている南三陸町中瀬地区の方々（佐藤徳郎区長）を訪問したことから始まった。その後、現地を数回訪ね、何度となくコンタクトをとり、大学の夏期プログラムとして学生ボランティア派遣の可能性を模索した結果として、実現に至った訳である。特筆すべき点と言えば、中瀬地区の方々との出会いを大切にして、実情に見合った計画を立てることができた点である。4月、5月と現地を訪れた際には、直ちに行動に移したいとの念に駆られたが、諸般の事情を考慮して夏休み期間の実施となった。結果としてそれが良かったように思う。このプログラムを実施するためには、入念な準備期間と労を厭わない職員各位の献身的関わりがあったことを忘れてはならない。

(2) 活動全般を通して痛感したことは、我が大学の学生達が豊かな「潜在能力（potentiality）」を持ち、将来に大きな可能性を秘めている点である。彼らはユーモアのセンスに溢れ、時宜に適った他者への気配りや、初対面の方に臆せずに自分の考えを伝える表現力に満ちていることなど、教師として「想定外」のことで、私には驚くべき発見であった。彼らの多くは、愛されて育ったので、必要な状況では「愛すること」が苦もなくできるのかなとも思った。やはり、教育には狭い教室という空間のみならず、より広い状況・空間となる臨床的な現場における実践的要素が有効なのかもしれない。

(3) 今回のボランティア活動における最大の成果と言えば、参加者すべてが事の重大さに打ちのめされ、生き方、ライフスタイルの方向転換が迫られたという点である。それぞれの感じ方、受け止め方は多種多様であるが、各自が看過できない大きな問いを突き付けられ、そこから新たな歩みを踏み出したと言えよう。この経験は、過去の一断面ではなく、確実に、それぞれの今後の生き方に指針を与えるものとなった。

2．その後の活動とこれから

多くの方々の支援を頂き、また参加したくてもできなかった学生のために、出来る限り、報告会やいくつかの文書や発行物を通して、この経験を分かち合いたいと願い、以下のプログラムを考えた。2012年1月には、キリスト教と文化研究所主催の公開 シンポジウムも計画している。大学は教育と研究の機関ゆえに、今後もでき得る限り、息の長い関わりを続けていきたいと願っている。

①「災害ボランティアチーム報告会」
10月26日（水） 於 F21―302（参加者100名強）

②「KGU燦葉フェスタ2011」懇親会
（松田研究員及び学生2名が報告）
11月3日（木） 於 ベンネットホール＆F21大会議室

③【公開シンポジウム】「東日本大震災、それから・・・」
2012年1月14日（土） 13時～15時30分
於 関内メディアセンター

テーマ：未曾有の出来事によって転換を迫られた「わたしたち」が、その出来事を契機に、それぞれ置かれた場において、独自の関わり合いを展開している。

今回は、東北・宮城県で、あの「出来事」以降、何かに後押しされるような思いを持って、自らの立ち位置で、救援活動をしておられる3人の若い伝道者をお迎えし、大学としては、今回の夏期ボランティアのチームリーダーとして参加した2人の教師、これら5人のパネリストによるデスカッションを中心にして、それぞれが今後でき得ることを共に見出す機会になればと願っている。皆さんの積極的参加を期待する。

主催・キリスト教と文化研究所
（「いのち」研究プロジェクト、日本の精神風土）

The space of the Member

取り結べる＜絆＞／取り結べない＜絆＞

「いのちを考える」研究グループ　客員研究員
（日本学術振興会特別研究員PD）
加賀谷 真梨

東日本大震災以降、人と人との＜絆＞に期待が寄せられ、各地でその形成が目論まれている。被災者同士、被災者とそうでない者、官と民、ひいては全国民の間で取り結ばれようとされる＜絆＞。時に過度にすら感じるそれらの喧伝・称揚も、ボランティア活動が停滞し、仮設住宅に住まう高齢者の孤独が懸念されている現状を顧みると必要不可欠なように思われる。

ところで、肯定的な意味合いを帯びながらも曖昧かつ抽象的な＜絆＞という用語を「唯一無二の存在たる他者の生への配慮ないし関心で取り結ばれる関係性」と、別言できないだろうか。現在も苦難の渦中にある被災者の存在の忘却が危惧される中で＜絆＞の重要性が再認識される現状を鑑みると、この換言は必ずしも否定されるものではないだろう。しかし、他者の生に対する配慮ないし関心を持つとき、そこで取り結びうる関係性の質の違い（親密さの度合い）に留意する必要がある。被災した家族の成員間、被災村落内の家族間、被災者とボランティア間で築かれうる配慮の関係性は必ずしも同質ではない。

筆者が足を運んでいる沖縄の離島社会においては、島民全員が互いの名前と家族構成を熟知し、他者に関する関心も高く、互いに強い＜絆＞で結ばれている。その一方で、島民としての関係性は、個々の「家族」の関係性を代替することができない。例えば、高齢者が島で最期を迎えられるよう、そのケア提供者を島民の中から養成し、また、デイケア施設が島内に整えられても、高齢者がその「家族」の決定によって島外の施設に入所する状況に変化は見られない。どれほど島の先輩たる高齢者の生に強い配慮・関心の念を抱いたとしても、その高齢者の生の決定に「島民」は参与できず、その決定権は「家族」が排他的に有するのである。

被災の経験がない者として、あるいは、同じ被災地の住民として、他者の生に配慮し関係性を取り結ぼうとする時、どこまで何ができ、何ができないのか。＜絆＞の形成に取り組む人が増える背後で、その内実を可視化することも、逆説的に＜絆＞を強めることに繋がるのではなかろうか。

関東学院大学　キリスト教と文化研究所
〒236-8501
横浜市金沢区六浦東１－５０－１
電話：０４５－７８６－７８７３（研究所直通 月～金曜 10：00～16：00まで）
FAX：０４５－７８６－７８０６（研究所直通 24時間受付）

発行者：帆苅　猛
Director: Takeshi Hokari